

温故知新

学生時代からの友人にローマ法の研究一筋40年の学究がいる。日々、降りかかる課題の処理に追われた私のような者から見れば、気の遠くなるような長い年月の古い法体系を勉強して何が面白いのかなと思うが、彼の言葉を借りれば、40年間研究しても思うところの幾らも会得出来ておらず、未知の深山に迷い込んだような心境という。しかも、古代ローマ人、否、人間の叡智がふんだんに織り込まれた宝の山という。

そうした話を幾度となく聞かされても、今更、ローマ法の世界を覗いてみる勇気もないまま最近に至っていたが、書店で、塩野七生氏の「ローマ人の物語」が文庫本で出版されているのを見つけて、これだと飛びついて読み始めた。手軽な文庫本のお陰で、電車の中や旅行の際にも必ず携帯し、本を開きさえすれば、瞬時にして、遥かなる時空を越えて、古代ローマの世界に誘われ、その世界に浸り切れるから不思議だ。

B.C.753年のロムルスに率いられた3,000人のラテン人によるローマ建国当時の話から始まって、有名なハンニバル戦記やユリウス・カエサルのガリア遠征、ルビコン渡河、魅惑の女王クレオパトラの運命等々の史実は、痛快であり、また、王政から共和政、更には帝政に至る当時の政体の変遷と、これをめぐるドラマ（悲劇、戦闘、決断）の中に登場する人物は、いずれも強烈な個性で真に迫ってくる。

と同時に、テヴェレ河沿いの小さな都市を起源として、地中海を挟んで東はユーフラテス河、北はライン河、西はスペイン、南は北アフリカ一帯に至る大帝국을創りあげ、支えるべく、古代ローマ人が様々な制度と課題（安全保障、通貨、農地制度、税制、金融、福祉、公共事業、行政改革、財政再建、中央集権と地方分権、宗教等）に取り組み、解決の努力をしてきたその生き様は、本質において、現在にも当てはまってリアルである。

まさに21世紀初頭にありながら、紀元を挟んで前後一千数百年の史実に、今に通ずる真理を見て胸打たれるとは、論語の中の孔子の言葉「温故知新」そのものである。

とりわけ、塩野氏のライフワークともいえるこの歴史書の中で剋目して見るべきは、

- ・戦争や侵略の結果生じる敗者たる異民族の隷属化，差別化は，近世に至るまで当然と受け止められているのとは対照的に，古代ローマ人は，敗者に対しても自分たちと同等の市民権を付与し，人材の国家登用，元老院議席の提供等も行い，新しい血を国の隅々に行き渡らせる同化政策，開放政策を国家の伝統としたこと，

- ・道路を単に一本の道路と見ずに最初に道路網として構築し，また，多岐にわたる法律を最初に体系化した民族は，ローマ人といわれている。が，更にローマ人が凄いのは，道路も法律も，現状に則して普段から手入れをし，利用者にとって最も便利な，現実にマッチしたものとして，常に改良・改正を加え，その機能を最高に発揮させるという先見性と柔軟性を有していたこと，

- ・ローマ人が道路，橋，水道等の数々の公共施設を建設したことは良く知られているが，更に，帝国のあちこちに，浴室，マッサージ施設，体育場，読書室等を備え，美しい彫刻や絵画を配した公共の大浴場を建設したことに端的に見られるように，心身を爽快にして現世を楽しむ現実主義に徹したローマ人の心のゆとりとおおらかさ，
であろうか。

科学・交通・通信技術の発展に伴い，グローバル化が進展する一方で，国家，地域，民族，宗教間の対立が先鋭化しつつある今に生きる現代人にとって，多民族，多言語，多文化，多宗教国家でありながら，永きに亘ってパクス（平和）を維持した古代ローマの歴史と諸制度は，考えさせられることのいっぱい詰まった宝の山であることは間違いない。

（（株）農林中金総合研究所理事長 堤 英隆・つつみひでたか）